

十三時

エドガー・アラン・ポー

森林太郎訳

オランダのスピイスブルク市が世界第一の立派な都会だと云ふことは、誰でも知つてゐる。併しもう遺憾ながら、世界第一の立派な都会だつたと云はなくてはならなくなつた。

あの市は本街道を離れて、謂いはば非常な所にあるのだから、読者諸君のうちであそこへ往つたことのある人は少からう。あそこを知らない人に、あの特色のある所を想像させるために、少し精くはしく土地の事を話すことは無益ではあるまい。己はこなひだあの土地にあつた重大な災難の話をして、あそこの市民に対する同情を広く喚起したいと思つてゐるのだから、その話の

前置として己の説明は一層役に立つ筈である。さて己の目的としてゐるその災難の事だが、その話をするとき云ふ責任を己が負ふ以上は、必ず力の限を尽してそれを果たすだらうと云ふこと、正しい古文書を比較して、自己の良心を満足させるやうに細密に事実を考へて、いやしく苟も歴史家たる身分に負そむかないやうに、公平無私にその話をするだらうと云ふことには、恐らくは誰一人疑をさしは挟はむものはあるまい。

己は金石文字や古文書を精しく調べて、先づあのスピースブルク市が始めて興つた時、矢張現今の地点を占めてゐたもので、それから後少しも移動したものでな

いと云ふことを確言することが出来る。併しその創立がいつの事であつたかと云ふことは、己も遺憾ながら或る不定の断案を以て答へるより外無い。兎に角非常に遠隔した時代の事だから、我々が溯つて計算し得る時代の最大距離に於いて、あの市は創立せられたのだと丈は己が明言しても好からう。

そこでスピイスブルクと云ふ地名の起原だが、これも矢張遺憾ながら十分に説明することが出来ない。臆説は種々に立てられてゐる。中にはいかにも巧妙で、緻密で、博識の言ことらしいのがある。中には又その反対だと思はれるのもある。併しその中でどれ一つ十分

の根拠を有してゐると認めて好いものは無い。己むこ
となくんば、一説を挙げよう。それはドイツの学者リ
ンド氏の説で、イギリスの学者ビイフ氏の説も略ほゞそれ
と一致してゐる。それはかうである。スピイスは槍で
ある。ブルクは城である。あの市で城らしい建物と云
つては、議事堂が一棟しか無いが、その議事堂の塔に
或る時雷が落ちた。その落ち工合が丁度上から槍で衝
いたやうであつたことを思ふと、此語源説が愈いよくもつとも
らしく聞えて来る。併しこんな重大な問題にうかと断
案を下して、跡で恥を搔きたくもないから、己はなん
とも言はずに置かう。読者が若し此問題を深く研究し

ようと思ふなら、有名なオランダの大学教授ホオルコ
ツプ氏のオラチウンクレエ・デ・レエ布斯・プレテリ
チスと云ふ本を見るが好からう。それから今一つ参考
して好い本は、ファン・デル・ドムヘエト氏のデ・デ
レワチオニブスの二十七ペエジから五千零十ペエジ迄
である。此本は大判の紙にゴチツクで印刷してあつて、
骨子になつてゐる語には朱と墨とで標しるしがしてある。
丁附は無い。此本にはファン・デル・ドムヘエト氏の
高足弟子として聞えた支那の民間学者シユツンプジン
氏の自筆の書入があるから、それも参考するが好い。
又註脚に大学助教授ドヨオジヒ氏の言つてゐることは

一顧に値する。

創立の時代も地名の起原も、こんなに不確實ではあるが、兎に角スピイスブルクは昔出来た日から今日撃する状況と少しも變つてゐなかつたと云ふことは明白である。市の故老に聞いて見ると、何一つ變つたと思ふことは無いさうだ。實際若しや變つた所がありはせぬかと云ふ問題でからが、それを口に出したら、あの土地の人は侮辱せられたやうに感ずるだらう。

市は正円形をなした谷の中央に位してゐる。谷の周圍は一哩マイルの四分の一位である。四方には景色の好い丘陵がある。市に住んでゐる人に、誰一人敢て丘陵の

いたゞき

巔いたゞきに登つたものが無い。さう云ふ堅固な土着的觀念が何に本づいてゐるか云ふと、実に尤千萬な理由がある。丘陵より先きに何物かが有るだらうと云ふことは、到底信ぜられないからだ云ふのである。

谷は総て平坦で、全面に平たい瓦が敷き詰めてある。此平地の外圍に円形をなして六十軒の家が立ててある。それだから家は皆丘陵を負うて、平地の中央に臨んでゐる。その中央の地点までの距離は、どの家の戸口から測つても六十フイット呎ある。どの家の前にも円形に道を附けた、小さい菜園がある。そこに円い日時計が据ゑ附けてある。そして円いキャベツが二十四本植ゑてある。

家と家とは飽く迄似てゐて、何一つ相違してゐる点が無い。建築の様式は少し異様だが、併し画の様な面白みがある。堅く焼いた、小さい、赤い煉瓦の縁へりの黒いので建ててあるから、壁が丁度大きな象棋盤しやうぎばんのやうに見える。家の正面には搏風はぶがある。屋根と表口の上とに、簷のきと庇とが出てゐるが、その広さが丁度家全体の広さ程ある。小さい、奥深い窓が細い格子しきで為切つてあつて、中には締め切つてあるのも見える。屋根に葺いてある瓦には長い、反かへね返つた耳が出てゐる。家に使つてある材木は皆暗い色をしてゐて、それに一樣な彫刻がしてある。それは古来スピイスブルクの彫刻師

が、時計とキヤベツとの二つしか彫刻しないからである。併しその二つは上手に彫る。どこでも材木の面が明いてゐれば、すぐにそこへ彫り附ける。

家は外面が似てゐる様に、内部も似てゐる。道具は皆同じ雛形に依つて拵へたものである。床は四角な煉瓦を敷き詰めてある。卓や椅子は黒ずんだ木で拵へて、振れた脚よちの下の方が細くしてある。壁に塗り籠めた大きい、丈の高い炉には時計とキヤベツとが彫つてある。炉の上の棚には、真ん中に本当の時計が一つ据ゑてあつて、それが断えず感心な好い音をさせてゐる。棚の両端には植木鉢が一つ宛置いてあつて、それにはキヤ

ベツが生えてゐる。それからその時計と植木鉢との間には、きつと支那人の人形が一つ宛立づつてゐる。ふくらんだ腹の真ん中に穴があつて、それを覗いて見ると、中には懐中時計の表面が見えてゐる。炉の火床は幅が広くて深い。それに恐ろしい五徳のやうな物が据ゑてある。そしてその上に壁に切り込んだ龕がんのやうな所から大きな鍋が吊り下げてあつて、中には一ぱいビールだるづけ麦酒樽漬にしたキヤベツと豚の肉とが入れてある。

鍋にはお神さんが氣を附けてゐる。お神さんは頬の赤い、目の青いをばさんで、あのカンチスと云ふ白砂糖の包紙のやうな円錐形の大帽子を被つてゐる。帽子

からは紫と黄色とに染めた紐が下がつてゐる。着物は
橙だいくのやうに黄いろい色の毛織で、背後うしろがふくらんで
丈が詰まつてゐる。全体此着物はひどく短い。脚の中
程までしか届かない。脚は円つこい。踝くるぶしも同断であ
る。その脚には綺麗な草色の沓足袋くつたびを穿いてゐる。沓
は桃色の鞣革なめしがはで、それが黄いろい紐で締めてある。
その締めた結玉がキヤベツの形になつてゐる。お神さ
んは左の手に小さい、重みのある懐中時計を持つて、
右の手には大きい杓子を持つてゐる。その杓子で鍋の中
のキヤベツと豚の肉とを掻き廻すのである。お神さ
んの傍には斑まだらの猫の太つたのがゐる。その尻つぽに

は子供がいたづらに金めつきの懐中時計を括り付けたので、猫はそれを引き摩つてゐる。

子供が今例にして話してゐる家には三人ゐる。それが三人とも前の菜園で豚の番をしてゐる。三人とも丈は二呎で頭に三角帽子を被つてゐる。赤いチヨツキが太股の辺まで垂れてゐる。ずぼんは膝切りで、ブツクスキンと云ふ毛織で拵へてある。沓足袋は赤い毛糸で編んである。重さうな沓には大きい銀の金物が付いてゐる。上着は長くて、それに大きい貝殻ぼたんが付いてある。皆煙管を口に銜へて、右の手には胴を円くふくらませた懐中時計を持つてゐる。口から煙を吹いて

は時計を見、時計を見ては煙を吹く。それをいつまでも繰り返してゐるのである。豚は皆ひどく太つてゐて、不精である。キヤベツの葉の枯れて落ちたのを拾つて食つてゐる。矢張猫と同じやうに尻つぼには懐中時計が括り付けてあるので、折々後足でそれを蹴ることがある。

家の戸口の右の方には、倚り掛かりの高い腕附の椅子がある。鞣革で張つた椅子で、脚は卓つくえと同じやうに振れて下の方が細くなつてゐる。その椅子に腰を掛けてゐるのが主人である。頬つぺたの非常にふくらんだ爺いさんで、目は真ん円で、大きい腮あじが二重ふたへになつ

てゐる。着物は子供のと全く同じ事だから、改めて説明しなくても好からう。只爺いさんの子供と違ふ所は、口に銜へてゐる煙管が少し大きいから、口から煙を余計に吹き出すことが出来る丈である。爺いさんも矢張懐中時計を持つてゐるが、それを隠しに入れてゐる丈が違つてゐる。これは別に大切な用事があるので、時計ばかり見てはゐられないのである。その用事がなんだと云ふことは直ぐに説明するから、待つてゐて貰ひたい。爺いさんはぢつとして据わつて、左の膝の上かたくに右の膝を載せてゐる。そして真面目な顔をして、少くも片々の目で虚空の或る一点を睨んでゐる。その一点

は議事堂の塔の上である。

議事堂には市の評議員達がある。皆円く太った、賢い小男達で、車輪のやうな目をして、大きい二重の腮を持つてゐる。上着は並の市民の着てゐるのより長い。沓の金物も市民のより太い。己がこの市に来て住むことになつてから、評議員達は二度特別会議を開いて、左の重大な決議をした。

第一条。何事に依らず古来定まりたる事を変更すべからず。

第二条。本市以外には一切取るに足る事なしと認む。

第三条。市民は先祖伝来の時計及キヤベツを忘却す

べからず。

議事堂の会議室の上が塔になつてゐる。塔の中には市の創立以来大時計が据ゑ付けてある。これが市の誇りで、同時に市の奇蹟である。家の戸口に据わつてゐる爺いさんの睨んでゐるのはこの時計である。

塔は七角に出来てゐる。大時計も矢張七角になつてゐる。どの面にも針があつて、どこからでも時が見られるやうにしてある。太い、黒い針が広い白い板の面の上にある。市の評議員達は塔の番人を一人雇つて、大時計の番をさせてゐる。番人はその外にはなんの用事もない。だから市には色々の名誉職があるが、大時

計の番人程結構な役人はゐない。用事は時計の番をする丈で、しかもその時計は丸で手が掛からない。市の記録に残つてゐる程の時代をどこまで溯つて見ても、大時計が時間を誤つたことはない。それが若しや時間を誤ることがあらうかなんぞと云ふことは、只それをおつたばかりでも怪けしからん次第だと、たつたこなひだまで市民一同が信じてゐた。

大時計と同じ事で、市中にある丈の置時計や懐中時計も決して時間を誤ることはない。世界中どこを尋ねても、このスピイブルク程誰でも時間を好く知つてゐる所はない。大時計が、「正午だ」と云ふと、市民一

同口を開けて、こたま 銜響のやうに「正午だ」と答へる。要するに市民は麦酒樽漬のキヤベツが好きなことは無論であるが、彼等の大時計に対する自慢は又格別である。

一体名誉職を持つてゐる人は、誰だつて尊敬せられるに極まつてゐる。だから一番結構な名誉職を持つてゐる大時計の番人が尊敬せられることは論を待たない。番人は市の大役人である。菜園に飼つてある豚でさへ、此人を見るには目をそはだ側てて見る。番人の上着の裾は誰のよりも余程長い。煙管も、沓の金物も、目玉も誰のよりも大きい。腹は誰のよりもふくらんでゐる。そこで臆はどうかと云ふと、外の人のふたへは二重だが、此人

のは立派に三重みへになつてゐる。

こゝまで己はスピイスブルク市の幸福な状態を話した。こんな結構な、泰平無事な都会に非常な災難が出来ようとは、実に誰も予期してゐなかつたのである。

余程前から市民中の有識者達が、諺のやうにかう云ふ事を言つてゐた。「岡の外からはろくな物は来くまい」と云ふのである。不思議にもこの詞が識しんをなした。

丁度一昨日をとつひの事であつた。正午前五分間と云ふ時、東の丘陵の巔に妙な物が見えた。いつにない出来事なので、どの家の腕附の椅子に掛けてゐる爺いさんも、胸に動悸をさせながら、片々の目でその妙な物を見て

みた。片々の目は矢張塔の大時計を見てゐるのである。

正午前三分間だと云ふ時、丘陵の上に見えてゐた妙な物が、小男で、多分他所者たしよものだらうと云ふことが分かつた。その男は急いで丘陵を降りて来る。姿が次第に好く見える。古来スピイスブルク市で見たことのない、馬鹿げた風体ふうていの男である。顔の色は煙草のやうに黄いろい。鉤のやうな形の大きい鼻をしてゐる。目玉は黄いろい大豌豆のやうである。広い口の中で綺麗な齒が光つてゐる。それを人に見せたがるものと見えて、いつも口を耳まで開けて笑つてゐる。その外は八字髭と頬髯とが見えるだけである。帽子を被らない頭の髪は

丁寧にちぢらせてある。体にぴつたり着いた黒服には、長い燕つばきの尾のやうな裾が付いてゐる。一方の隠しから大きな、白いハンケチが出掛かつてゐる。ずぼんは黒のカシミアである。沓足袋も黒い。足に穿いてゐるのは長靴と舞踏沓との間の子あひのやうな物で、それに黒い絹糸の大きな流蘇ふさが下がつてゐる。片々にはシヤポオ・クラツクを腋わきばさ挟んで、片々には自分の丈の五倍もあるオオリンを抱いてゐる。そして右の手に金の嗅煙草入を持つて、妙な身振をして丘陵を駆け降りながら、得意げな様子で嗅煙草を鼻に詰め込んでゐる。いやはや。スピイスブルク市の良民の為めには、実に途方も

ない見物である。

好く見れば、此男は笑つてはゐるが、どうもその面附きが根性の悪い乱暴者らしく見える。それに市の方へ向いて駆けて来る足に穿いてゐる変な沓が、誰の目にも第一に怪しく見えるのである。それにあの黒服の隠しから出掛かつてゐる白いハンケチの背後うしろには何が隠してあるか、見たいものだと思つた人も大ぶある。兎に角此男が怪しい曲者だと云ふことは、フアンダングやピルエツトの踊の足取をして、丘陵を降りて来るのに、一向間拍子まびやうしと云ふものを構はないのを見たばかりでも察せられる。

そのうち正午前三十秒程になつた。市民等が目を大きく開いて見ようとする隙ひまもなく、外道奴げだうめは市民等の間を通り抜けて、脚ではシャツセエをしたり、バランセエをしたり、ピルエツトをしたり、ペア・ド・ゼフイイルをしたりして、羽が生えて飛ぶやうに、議事堂の塔の上に駆け登つた。大時計の傍には番人が驚き呆れながら矢張息張いばつて、ゆつくりと煙草を喫んでゐた。外道奴は番人の鼻を撮んで、右左にゆすぶつて、前へ引つ張つて、それから腋挟んでゐた大きなシャポオ・クラツクを番人の頭に被せた。そしてそれをずつと下へ引くと、番人の目も口もすつぽり隠れてしまつた。

それから大きなオオリンを振り上げて番人を打つわ、
打つわ。胴の空虚なオオリンで、太つた番人をほかほ
か打つので、丁度議事堂の塔の上で鼓手が一箇聯隊位
太鼓を叩き立ててゐるかと思ふやうである。

こんな怪しからん事をせられて、スピースブルクの
市民等が復讐をせずに見てゐる筈はないが、兎に角正
午までにもう半秒時間しかないと云ふ重大な事件があ
るから、その外の事は考へられない。今に大時計が打
たなくてはならない。それが打つ以上は、スピースブ
ルクの市民の為めには、てんでに懐中時計を出して時
間を合せるより大切な事はない。驚いた事には、その

職でもないのに、外道奴、丁度此時大時計をいぢくり始めた。併しもう大時計が打ち出すので、市民はその方に気を取られて外道奴が何をするやら、見てゐることが出来なかつた。

「一つ」と大時計が云つた。

「一つ」とスピイスブルク市民たる小さい、太つた爺いさん達が、しだま 飢響のやうに答へた。「一つ」と爺いさんの懐中時計が云つた。「一つ」とお神さんの時計が云つた。「一つ」と子供達の時計や猫の尻つぽ、豚の尻つぽの時計が云つた。

「二つ」と大時計が云つた。「二つ」と皆が繰り返した。

「三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、九つ、十を」と大時計が云つた。

「三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、九つ、十を」と皆が答へた。

「十一」と大時計が云つた。

「十一」と皆が合槌を打つた。

「十二」と大時計が云つた。

「十二」と皆が答へて、大満足の体で声の尻を下げた。「十二時だ」と爺いさん達が云つて、てんでに懐中時計を隠しに入れた。

然るに大時計はまだこれでは罷やめない。「十三」と

大時計は云つた。

「やあ」と爺いさん達はうめくやうに云つて、鯉が水面に浮いて風を呑むやうな口附きをして、顔の色が蒼くなつて、口から煙管が落ちて、右の膝が左の膝の上から滑つた。

「やあ、十三だ、十三時だ」と皆が歎いた。

これから後に起つたスピスブルク市の恐ろしい出来事を筆で書かうと思つても、それは不可能である。兎に角市を挙げて大騒乱の渦中に陥つたと云ふより外はない。

子供は異口同音に云つた。「おいらの時計はどうし

たと云ふのだらう。おいらは一時間も前からお午が食べたくてならない。」

お神さん達は云つた。「まあ、わたしの鍋はどうしたと云ふのだらう。もう一時間も前から豚もキヤベツも煮えくり返つてゐる。」

爺いさん達は云つた。「己の煙管はどうしたと云ふのだらう。もう一時間も前に吸殻になつてゐなくちやならんのだ。」かう云つて爺いさん達は腹立たしげに煙管を詰め更へて、腕附の椅子に倚り掛かつて、忙がしげに煙を吹き出した。スピイスブルク市は忽ち煙草の煙に包まれて何も見えなくなつてしまつた。

その時市の菜園に作つてあるキヤベツの頭が、皆腹を立てたやうに真つ赤になつた。それから矢張外道奴の所作と見えて、家々の道具に為込んである時計や置時計が魔法で踊らせるやうに踊り出した。炉の上の棚にある時計も腹が立つて溜まらないと云ふ様子で、十三時を繰り返し繰り返し打ちながら、下振さげふりをめちやめちやに振り廻した。それから猫や豚が、尻つぽに括り付けてある時計の十三時を打つのが不都合だと心得たものか皆駆け出して、きいきい、にやあにやあ啼きながら、そこら中を引つ搔いて、何もかも蹴飛ばして、人の顔に飛び付いたり、着物の裾にこんがらかつたり

した。なんともかとも云はれない大騒乱である。

それに塔の上にあるいたづら者奴は却つてわざと此騒乱を大きくしようとしてゐるらしい。折々煙草の煙の隙間から仰向いて見ると、いたづら者は番人を仰向けに寝させて、その上に乗つて、大時計の上に吊つてある吊鐘の綱を口に銜へて、頭を右左に振りながら鐘を鳴らしてゐる。あの時の事を思ひ出すと、己は今でも耳が鳴る。いたづら者奴、鐘が鳴るばかりでは足りないと見えて、膝の上に大きな中オリンを置いて、間拍子に構はず、「ねえ、テレザさん、降りてお出で」と云ふ歌の譜を弾いてゐる。

己はこんな怪しからん事を黙つて見てゐるに忍びない
いので、早速スピイスブルク市を逃げ出した。そこで
天下の麦酒樽漬のキヤベツの好きな人達に檄を飛ばして
援すくひを求めゝる。寄語す。天下の義士よ。決然起つて、
隊を成してスピイスブルクに闖入して、市の秩序を恢
復し、狂暴者を議事堂の塔の上より蹴落さうではあり
ませんか。

底本：「鷗外選集 第十五卷」岩波書店

1980（昭和55）年1月22日発行

初出：「趣味 六ノ四」

1912（大正元）年10月1日

入力：tatsuki

校正：もりみつじゅんじ

2001年11月20日公開

2006年4月8日修正

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。